

つながる生き物 つながる暮らし。

ひと昔前、田んぼをのぞけば、メダカやドジョウが泳ぎ、

あぜ道ではバッタが跳ねていました。

とりわけ松前町は、水が豊かで、自然に恵まれた土地。

たくさん生き物が、つねに人間のそばで生きていました。

しかし最近はどうでしょう。

小川はコンクリート化し、道路はきれいに舗装され、

多くの方が、身の回りから生き物たちが消えつつあると

実感しているのではないのでしょうか。

今回の特集では、人と生き物の豊かな関係を取り戻そうとする、

町内のさまざまな取り組みを紹介します。



池や川をつくり 自然の生態系を復元 ビオトープ「エミフル」完成

町は、地域の自然環境への愛着を深め、環境への意識を高めてもらおうと、エミフルM.A.S A.K.I敷地内にビオトープをつくりました。ビオトープとは、ドイツ語で「生物の生育場所」という意味。かつて、松前町に生息していたメダカ、ドジョウ、オオバコなどは、昭和40年代からの環境の変化により減少してしまいました。そこで、池、川、



1_敷地中央に約90㎡の池を整備。まず、掘削し真砂土を覆い石組。田の土を入れ、水を入れた 2_池の西にある排水口から約50m東方向に流れをつくり小川を整備。緩衝材として毛布を敷いて防水シートをはった 3_田の土を入れて石組。大勢の力で急ピッチに作業が進む 4_イトトンボ 5_オオバコ

ビオトープ「エミフル」



解放中です。自由に見学できます。

*池には入らないでください。
*池の魚などは持ち帰らないでください。また持ち込まないでください。



松前町まちづくり塾 塾長
重松茂さん

ろなことに活用してもらいたいですね。学校では、子どもたちの授業の場にしてみらいたいです。まちづくり塾としても自然観察会ができればと思っています。そんなふうには地域の人が愛され、見守られながら、にぎわいを見せてほしいですね。来年の夏、この池でたくさんの魚の稚魚が産まれ育つこと、ヤゴがトンボに羽化する姿が見られること、ホタルが池のまわりを乱れ飛ぶことなど、夢には限りがありません。5年後、10年後が本当に楽しみです」

現在、植物は新芽が出てきて花を咲かせているものもあり、メダカが泳ぎ、トンボが飛び交っています。

「ビオトープは、これから何年もかけて育てていくもの」と重松塾長。これからのビオトープに、次のような期待を寄せます。

「松前の自然をもっと知るために、このビオトープをいろいろ

湿地を再現することで自然の生態系を復元しようとしたのが、ビオトープ「エミフル」です。

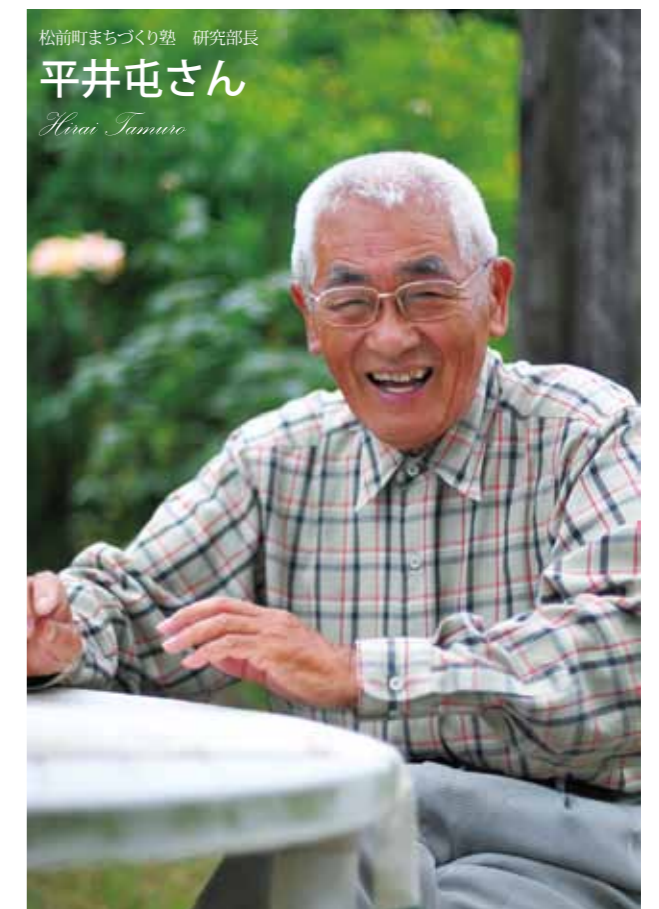
ビオトープ整備にあたっては、松前町まちづくり塾の重松茂塾長は、「できるだけ、松前町に昔からいた生き物や草を集めてつくりました。50、60代の人にとっては、ちょっと昔の松前の水辺。塾生は皆ちようどその年代なので、昔の松前の水辺を子どもたちにも知ってほしい、ずつと残したいという想いを込めて取り組みました」と振り返ります。

塾には、生物が好きな塾生もいれば、植物に詳しい塾生もいます。そんな塾生が「あれはあそこにある」と、昔から松前にあったものを採取してきてビオトープに移植しました。土木関係の仕事をしている塾生もいたので、池や小川の整備も順調に進みました。

松前町まちづくり塾 平井屯 研究部長に聞く

ビオトープから見る 生き物と人間の関係

池や川をつくり、自然の生態系を復元したビオトープ。なぜ、ビオトープをつくらなければならなかったのでしょうか。なぜ、地域の自然環境への愛着を深め、環境への意識を高めてもらうことを啓発しなければならないのでしょうか。そこには、生き物と人間の関係式があります。松前町まちづくり塾の塾生で、元中学校の理科教諭の平井屯さんに聞きました。



松前町まちづくり塾 研究部長
平井屯さん
Hironori Hirai

―昔と今の松前の環境はどう違いますか？

昔は生き物がわいてきていました。草の中からイナゴが飛び出し、川底を掘ればドジョウが出て。今は姿を見なくなったホタルもたくさんいました。昔の農業は、今みたいに農薬や機械でできる短時間作業じゃなかったから、生き物が生き残る場所がたくさんあったんです。カエルがいても、タニシがいても、稲を食べるわけじゃないし、あらゆる生き物と一緒に、私たちは生活してしま

た。

今は、川をコンクリートで囲い、人間に都合のいいものだけ残して生活しています。いろんな所にいた生き物が姿を消しました。―生き物が姿を消した原因は、人間が開発を進め、生き物の住む環境を奪ったことその他にどんなことがありますか？

現代はペットブーム。商業利用のための乱獲や過剰な採取などによって絶滅に追いやられた生き物もいます。また、ブラックバスやブルーギルなどの外来種の侵

入によって、昔からその地域に生息していた在来種が捕食されたり、生息場所を奪われたりしています。それから、地球温暖化により、生き物の絶滅のリスクを上げてしまったことも理由の一つです。―外来種はどうやって入ってくるのですか？

園芸用や食用として輸入されています。田んぼや水路でよく見かけるようになったジャンボタニシも、食用として入ってきた外来種。在来種タニシは、稲を食べる一方、ジャンボタニシは稲を食

や利便性を追い求める私たちの暮らし方が、生態系を変えたので。―どこを見ても同じような生き物ばかり。生態系が単純になってきています。―生態系が単純になるとどうなるのですか？

生態系が壊れやすくなります。生き物はどこかでつながらり支え合って生きているからです。以前、北半球に生息するミツバチの4分の1が消えたというニュースがありました。ミツバチがいなくなると、花粉を運んでくれるものがいなくなり、人工授粉しなければならなくなりました。そんなふうにして、ありとあらゆるものが、誰も知らないところで衰退しています。これが今、世界的に問

題になっている「生物多様性の危機」です。―生物多様性が失われるとなぜいけないのですか？

アイルランドの先住民はジャガイモを食べて生きていました。ある時、疫病が発生してジャガイモが不作になったせいで200万人が飢え死にしたのです。すなわち、単純にしていたら病気や変化に対応できない。今、日本は水田で成功しています。農業でコントロールして、でも単純にして効率を求めたら、そこには危険が潜んでいます。麦だけ、米だけ創る。上手くいっている時はいいけど、問題が発生したら？ 食べものがなくなったら？ それが大震界で起こったら？ これは大震災よりも重大な危機だと感じま

す。いろんなものがあれば、いろんな可能性を引っ張り出せる。薬のものは全部自然の中にあつたものを抽出してつくられてきました。だから生物多様性が大事なんです。―生物多様性を守るために必要なことは何ですか？

「いろんなものを残す」「我慢すること」が大事です。ハチがいても「キヤー」じゃなくてね。ハチは人間が余計なことをするから刺す。自分が嫌いな生き物がいても、そっとしておく余裕がほしい。ハチもへびもコオロギもカビも必要。多様な環境、松前町に昔からあつたものを残さなきゃ。残すためには環境が必要。だからビオトープをつくりました。―これからのビオトープは？

まちづくり塾は、できるだけ松前のもの、せめて愛媛県に分布しているものを入れて保存しようとして取り組んでいます。それらがビオトープの中でどうなるかを調べ、そこで起こる問題を外に発信していこうと思っています。―ビオトープは、まだ完成じゃありません。これから昔の生き物の楽園を作ろうとしているのです。みんなが関心を持ち、課題を持って来れば、答えがそこにあるようにしたい。いろんな生き物がいると、そのつながりが見えてきて、いろんな知識が手に入るはずなんです。在来種の元気な環境は松前町にしかないもの。文化財と同じようなものです。いろんなものを残して、うまく利用していくことが大事です。

生き物から得た可能性

私たち人間は、生き物から実に多くの恵みを受けています。



自然に守られる暮らし

豊かな自然や河川は、災害防止の機能を持ち、安全な飲み水を供給するなど、私たちの暮らしを支える基盤となっています。



豊かな文化の根源

自然に接することで、地域色豊かな食、工芸、祭りなどの自然と結びついたさまざまな文化を生み出してきました。

さつま汁_松前の畑の幸「麦」味噌と松前の海の幸「小魚」をあわせた郷土料理が生まれました。



生き物の機能や形状の利用

カワセミ_500系新幹線の形は、カワセミの頭部をヒントに考えられました。



貝_水を体の中に入れ、プランクトンをとって、水を体外に出します。つまり水をきれいしてくれています。

生き物のにぎわいを守るために

町内のさまざまな地域が、生き物が暮らす自然環境を守っていきこうと取り組んでいます。

国近川自然保存会

生き物が住めるようにと 続ける国近川の清掃活動



「生き物が住める川にしよつ」を目標に、2カ月に1度、国近川の清掃活動に取り組んでいる「国近川自然保存会」。メンバーは国近川を愛する地元の有志25人です。

会の発起人で代表の矢田弘さんは「散歩していた時、川にごみがたくさん捨てられているのが気になって。川を掃除しようと呼び掛けたら、近隣の人が賛成してくれて、平成18年に発足しました。先日、30回目の清掃を終えたところですよ」と話します。

会は現在まで、約20トンのゴミを拾い上げました。清掃を重ねるうちに、小さい生き物が少しずつ増え、今ではカニやカメも見ることができるようになっていっています。

「うなぎなど、もっといろいろな生き物が増えたらいいな」と微笑みます。「そのためには、みんなが同じ意識を持つことが必要」と矢田さん。

清掃活動では、会員以外にも参加を呼び掛け、大勢の人に環境に対する意識を持ってもらえるように努めています。

「川は、河口から上流までつながっていて、ほとんどの生き物は下流から中流、中流から上流へと移動しながら生活しています。生き物のにぎわいを守るためには、ここだけきれいにしてもダメだということですよ。これは川に限らず、全ての環境に言えます。森も川も海もつながっていますから」と力を込めます。



YADA HIROMU

DATA

発足 平成18年5月
会員数 25人
活動範囲 国近川の高山橋から大國橋までの範囲約1キロ

上高柳さかさホタルの会

自然と人間が共存する 「ホタルの里」づくり



重信川の伏流水による豊富な湧水や地下水に恵まれ、昔からホタルが多数舞う場所だった上高柳地区。農業の近代化、河川改修などで、ホタルを見るのができなくなりました。

「なんとかしたい」と地元の有志17人で構成する「上高柳さかさホタルの会(大西巖会長)」が結成。会では平成19年、地域の豊かな自然を守り伝えていこうと、ホタル再生活動に乗り出しました。

メンバーは、ホタルの川づくり作業から始めました。2月、川に石を組みホタルの幼虫の隠れ家を作り、川岸に砂を敷き野草を植栽しました。4月、花も咲き自然の川らしくなったところで養殖していたカワニナ(ホタルの餌)と

ホタルの幼虫を放流。5月にはホタルが飛び始めました。第1回ホタル観賞会では、大勢の人が蛍の飛び姿に歓声を上げて喜びました。以降、ホタルの産卵、養殖作業を進め、ホタル観賞会を毎年開催。おでんやジュースを販売してホタルの育成資金にしています。

自然の影響を受けやすいホタル。「養殖は容易じゃない」とメンバーは口をそろえます。他のホタル団体を見学し、研究を重ね、現在は水量を多くした循環式ホタル川でホタルを養殖しています。

メンバーは「将来は松前町全体にホタルがよみがえり、豊かな自然の中で乱舞する姿を見られれば」と願っています。



OHNISHI IWAO

DATA

発足 平成19年1月
会員数 17人
活動場所 上高柳神ノ木(グリーンハウスシオン)

青い空、清らかな水、緑豊かな自然を子や孫に継承するべく「ほたるの里」づくりに挑戦します

DATA
発足 平成19年1月
会員数 17人
活動場所 上高柳神ノ木(グリーンハウスシオン)

田植えをする岡田小5年生



重信川で生き物を調査する岡田小4年生



田植え体験をする青葉幼稚園児

自然とふれあえば、見えてくる。

自然の恵みを将来につないでいくために

生き物たちの住む環境を奪っているのは、他でもない私たち人間。食いつめることができるのも私たちです。今、私たちにできることは—

私たちは当たり前のように呼吸をしています。水を使い、木を切り、尊い命をいただき、生きています。そんな当たり前の日常では、生き物は互いにどこかでつながり合って生きているということをお忘れがちです。

「総合的な学習の時間」で重信川の生き物について調査している岡田小学校の4年生。重信川の生き物を調べ、地域の環境に目を向けています。

「社会科の授業」の一つとして米づくりに取り組む同校の5年生。自分たちが手植えし、水を管理し、かまで稲を刈ります。自然の中に身を置くことで、自然の力を感じ、生命の尊さを学んでいます。

青葉幼稚園の園児も、渡部寛さん(徳丸)が所有する水田で、農業を通して自然とふれあうことを目的に、田植え体験をしています。

岡田小の児童も青葉幼稚園の園児も皆、いきいき活動していました。そんな子どもたちを見てみると、「自然を残さなくでは」と感じずにはいられませぬ。子どもたちも肌で感じているように、「自然を大切にしよう」という気持ちを実感できないかもしれません。

子どもたちが自然とふれあうことで、自然を守ることの大切さを学んでいるように、大切なことは自然とふれあう機会を持つこと。日々の暮らしの中で、生き物とのつながりを意識するということは、自然の恵みを守る最も基本的な行動だからです。

夏休み直前です。今年の夏休みは親子で自然にふれあってみませんか。子どもの頃、魚とりや虫とりを経験した大人が、子どもたちと一緒に楽しみな自然と親しめば、身近な生き物の変化を知ったり、その知識を子どもたちに伝えたりすることもできます。

自然の恵みを将来につなぐための一歩。それは些細なことでもいいのです。例えば、いつもは足早に通る過ぎる風景に、少し立ち止まり目を向けてみる。一人一人がそういう姿勢で生活できると、人と自然が心地よく共存していけるはずですよ。そして、「自然とふれあう」ことから、「自然を汚さないようにする」ことや、「家族や友人と自然の大切さについて語る」ことなど、自然の恵みを将来につなぐために、自分たちにできることを考えていきましょう。

野々っくらぶ 小さなこどものための自然観察会

野々っくらぶでは、就園前の子どもたちに地域の自然にふれてもらおうと、自然観察会を開催しています。

●第2回 砂浜の生き物の会

日時 7月25日(月) 10時~11時30分

場所 塩美園、塩屋海岸

対象 就園前の子どもと保護者。大人だけでも参加できます。



服装 帽子、運動靴
持ち物 お茶、タオル、サンダル(濡れても大丈夫なもの)など
申し込み 7月22日(金)まで随時受け付け(先着15組)
申込先 町民課生活環境係 ☎985-4117
子育て支援センター ☎985-4151